伊勢參宮名所圖會　五上

特1
274

国立国会図書館　　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

伊勢參宮名所圖會卷之五

目録

舘
祓所
一殿 直會殿
御輿宿
第四御門
八重垣 玉串御門 瑞垣御門
内宮正殿 相殿二座 心御柱 内宮訓條
百枝松 東宮殿 西宮殿
西鳥居
幸宮右殿
興玉拜所石壇
御笏座のつゞ
神路山
宿衛殿
八十末社
天津神社
國津神社
御稲御倉
手水場
廳舍
外幣殿
冠木鳥居
笋三鳥居
荒祭宮遥拜所
外宮遥拜所
石壺
忌火屋殿
玉串所
脊王候殿
内宮中一鳥居
二鳥居

自井氏藏書

特1
274

元・社 裏御門 小鳥居 小端垣御門

御池

河原祢社　由貴殿

子良鉾　又十玲川橋

末社　八百會遥拜所

川原役所　落合川原

高倉殿 正宮 別宮 境辺乃社　山祢社

御贄小屋　一の瀬

長尾 俎板石 鮑ヲ割石

瀧祭宮　家之茶屋

宮川　鶏鳴石

伊雜宮 大嵐宮 猿田彦社 飯坂乃社

荒祭宮　同宮末社東西遥拜所

川島祢社遥拜所　櫻宮

酒殿　朝庭遥拜所

僧尼拜所　風宮

瀧祭宮　瀧宮垂宮

御厩

石井祢社　荒木田氏社

三方石　杉坂

合坂　猿田彦森

鼈石　鼎石

恵利原

楠部嶺 朝熊乃嶺 一宇田嶺 弘法茶屋 垂原嶺 天狗岩

五月ノ一

朝熊岳　岩舟　弁天　勝峯山會剋證寺　義経佩刀　文殊堂

熊野三社　万倉舟　下乗　求聞持堂　極楽橋

明星水　手向地蔵　経ヶ峯　龍池　万倉寺境　阿弥陀堂　二王門　連珠橋　連珠池　雨宝童子宮

岡山堂　東岳和尚像　七社祢　永松庵　秋田城之女実墓　高原右馬之允墓

朝熊村

小朝熊社　朝熊森

畠川村　廉海社

山田原 西行法師 旧法　三津浦 三津村 家乃石　五峯山密巌寺

鼻人古墳　九山 御座石　伊勢三郎宅地 硯石

濱萩　鷺島 亀ヶ乗　姫小松　出口村氏社

堅田社遥拜所　高山

河崎 (二丁乃) 辺里　通村　箕曲氏社 天祢社

常村子　御食社　三枚橋村　大津社　今一色村

古主 松坂 (三丁乃)　大湊 御手洗清水 志摩国社　八幡宮　二軒茶屋　神社村　小林社 御級所　高塚濱　黒潮

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

歩誠渓　清浦　御塩殿　立石磯
二見浦　興玉石　繋石　江村　湖青山大江寺
江神社　苔絵明神　亀ノ甲　松下　藏氏社　苔絵松

興島巡覧

許母利神社　神前小石　神前手洗鉢　神前涼渓
小渓　轟下　布瀧　由貴津　宿浦　神津佐荒磯　蛸柄　礫浦　相賀
阿曇渡浦　日和山　佐田渓　多羽浦　波切地渓　酢我磯　伊良御磯

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

舘町橋の東の町なり

冝秡戒斎籠の舘舎也　神庫　宿紙の事より

一鳥居　本宮の入口の鳥居一つのる事より凡十三丁半延喜式より七里とひしく二十一里の間をへて祀せり

手水場　一つのる事より入て右の方より十鈴川の流れ凡の宮の第の流をとり猿石の方の流をとの落合一此辺を玉串川合淵ともいふ落合ゆへの名なり　○猿石　二のる石より南の石壇なり　昔し勅使此石を以て修祓をなすゆへ猿石をなをるひみぞ

猿石　一つとく今いわり　一名宮の舟とも云ふなり

○巌社遥拝石　猿石のむかふの方なり本宮の岩井の神をみ奉る俗ふ一の宮とも

高水上命　大水上の児　此神社は宮中の神をみ奉る俗ふ一の宮とも

二名の石　次のる事より勅使参向の時此石にて大麻神塩湯を献ぐ

廳舎　二のる石より入

一殿　左のかた

此殿は勅使の直會殿也一殿とは云ふものの

外宮にては内宮の九丈殿と云則九丈殿の二字相並ぶ古書より此殿

五間とあれども今は三間二面と称す十柱殿と俗称せり

忌火屋殿　大神宮の御饌を調へ奉中より十三度斗取て備ふる二面宮の御饌

殿は外宮にあり外宮の勅使の儀式より内宮の勅使は略儀也

六月十六日より九月九月十六日より十七日十二月十六日

荒祭宮の遥拝石　忌火屋殿の東の石壇なり

外幣殿　御輿宿　左の方の右の方にあり　齋宮

紗の幕を以天井なれば此名あり　紗の幕は御輿宿の御門の幕なり

豊受神石豊　冠木の事より南の方にあり　此を御稲御門と云傳ふ小社也

菅の心殿　冠木の事より南の方にあり　菅の心殿の東の方にあり

の二殿　其中の洲

三節の祭　御饌供進せり　洗米

稲一束より奉る此石にて御稲掛の拝石とも云ふ　名あり

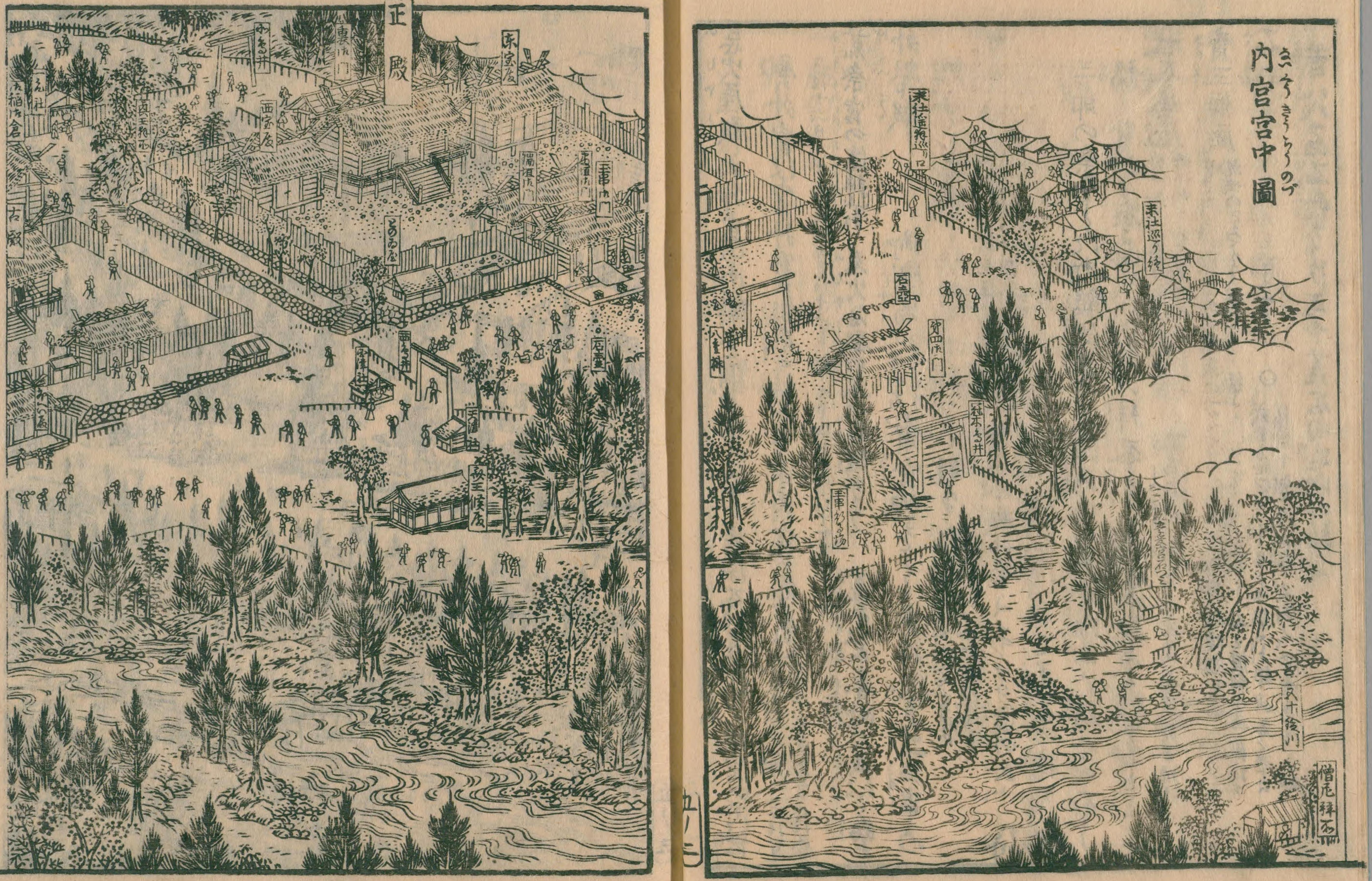
冠木鳥居　菅原御門の事也　御門より南荒垣御門とも

齋王候殿　菅原御門の内をいふ此の外東の方にあり　候殿東西二棟

石壺　菅原の御門の内左右にあり　○　或云東に二つ西に二つ中に二つ

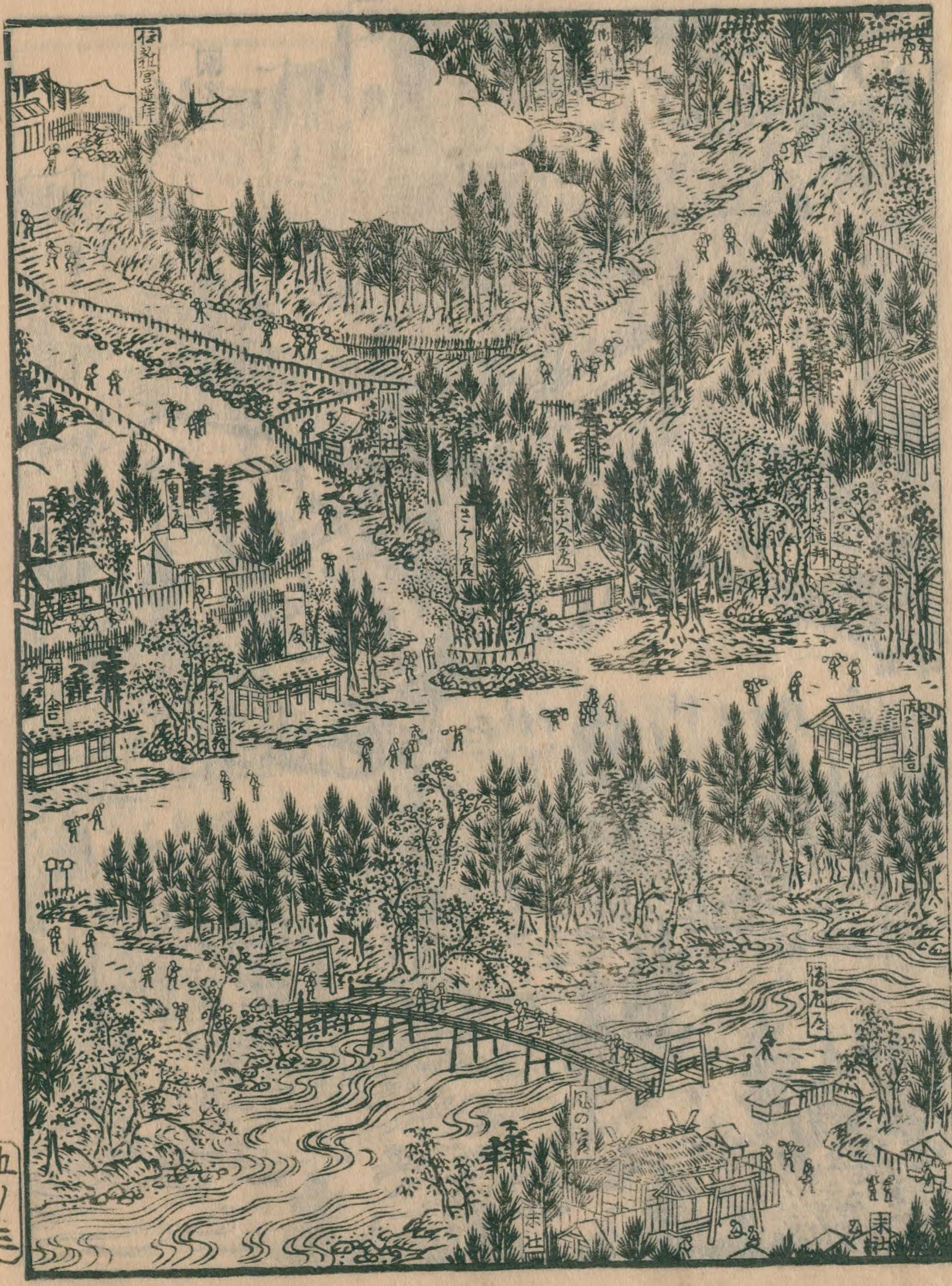
菅ハ八ツの石壺なりしを荒木田延成の説也

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

其二



国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

排りて八ツの石壺をもてかこし玉垣その外内の宮人

第三鳥居 玉串御門の外にあり 是を第二の御門ともいふ ○八重榊 第三の鳥居の左右に榊を編付て玉串と名付て 山向拾尽内人のはしまする祓之榊の枝数を[illegible]

八重さかきとは重々茂る枝を数々に多くならべて若紙いのりん

玉串御門 第三の鳥居の内にて外宮に同し ○蕃垣御門 玉串御門と瑞垣御門との間の小門にて外宮に同し ○瑞垣御門 蕃垣御門の内にて外宮に同し

荒木田延成

内宮正殿

天照皇大神　一座

相殿　東　手力雄命　西　万幡豊秋津姫命 日本紀に栲幡千々姫

日本書紀神代巻云 いにしへ天なく地なく人もなき時はたとへば鶏子の形を含るがごとく 其清きものは先天となり 濁れるものは後に地となる 其中に一ツの物を生ず 状葦牙のごとし 便化して神となる 是を国常立の尊と云 其余又化して土泥沙の神生じて後伊弉諾伊弉冊二柱の神生まれを イサとは誘の言にてナは助語 ナギとは男の義にて二ツを通じて女に従ふ事を云 即二柱の神 男女陰陽の耦ゆゑ 神は陰陽の気化して成るの理をいふ 天の浮橋に立て瓊矛を指下し探給へば 矛の滴瀝凝て一ツの島となる 是を磤馭盧島と云 ヲノコロとは自ら凝固るとの義也 これを国中の柱として共に居給ふ

されば二柱の神の身に男となり女となり 其元の処一ツあり 是を二ツ互に合せて始て遘合して夫婦となり ミトノマグハヒは巻にて交合の時の法 大八洲を生む 淡路洲 大日本豊秋津洲 今の大倭 伊予二名洲 今の四国 筑紫洲 今の九州 億岐洲 佐渡洲 越洲 大洲 吉備子洲これなり 又対馬壱岐島及処々の小島を産む 次に海川山草木を生給ひ 次に天下の主たるものなからんやとて日の神を生給ふ 号して大日孁貴と云 天照大神の御事也 此子光華明彩して六合の内照徹る 二柱の神喜び給ひてこれを天に送る 此時天地相去ること未だ遠からず 次に月の神を生給ふ 其光彩日の神に亜げり 故に又天に送る 次に蛭子を生む 此子三歳にあしたゝず[illegible] 次に素戔嗚尊を生む 此子勇悍暴悪の神にて スサノヲノスサは荒之意にて風をさむるごとくもよめり ノは助字 ヲは男之[illegible] 是天地の[illegible]暴風[illegible]旱[illegible] あるとき日の神の御田の畔を毀ち 又新嘗きこしめす新宮に屎をけがし 又神衣を織給ふ斎服殿を天斑駒を剥して殿の甍を穿ちて是を投納る 日の神驚きて梭をもて身を傷く 此三ツまでの不祥は衣食住の三ツを害せるに比せり 日の神甚だ怒憤まして天の窟に幽居給ふ 故に六合の内常闇にして昼夜をま

うさぎ 是彼霧霽の故に日光の届きまでよれと云

山に並ひ八十万の神天の安河原に集會して其祷べき方便を思兼神に計て 思兼とは思ひ兼ぬる事を分別して人と異なり優れたる智者なり 常世乃長鳴鳥に長鳴せしめ 鶏の長鳴東方明んとす それら紀に見えたり 手力雄の神を磐戸の側に立せ天津児屋根命太玉命に香山の真坂樹を数百株掘して上の枝に多く瓊の統ぎたる絲を懸中の枝には八咫の鏡を掛け下の枝に青幣白幣を懸又天の細女命茅纏の矛を持せ岩戸の前に俳優し

児屋根命は河内平岡又春日に祀太玉は大和高市郡に祀る 忌部の祖なり 瓊鏡幣は其かたちを藪顕なり今に神前に神籬がおく 総構奇麗なる物を御装束のなりといふ○俳優のワザは態之ヲキはヲギノリの略にて神を招請の心なり 今も神の前に楽歌は猿楽のわざは其ゆゑなり 又賢木を以て ヒカケは蘿 庭燎を多くたき覆槽とさて 蘿葛をもて手繦とし くさなり

ろにして神明憑談を ウケとは槽をうつむけたるなり今神巫女が弓をもて神をおろし奉る具のおもかげなり かんなぎとは其槽とうろへに神のりうつりて人に物いひ示すとらふ一書に云弓六張をならべ琴とせしなどといへり 此神の泥したる又ウケとは誓ひのうそて今俗に神がかりと云ものなり されば今岩戸の前にちうひを以て世に出ますることを俟つなり 此時に於天照大神磐戸を細く開きて窺見せらるを手力雄其御手を奉て引出し奉るが中

臣の神たち端出縄を曳て復び入らせ玉ふなとぞ申ける 素盞嗚尊の髪を抜き爪を拔て罪を贖ひかの根の国へぞ逐やりける

根の国とは地下のもろもろをさして根の国といへるなり○素盞嗚尊より簸川上にまゐて手摩乳脚摩乳の女稲田ひめを娶て八岐大蛇を退治して草薙剣を得らる 出雲に宮造りを大社是なり

○天神地神の年数を書て見すに天神九代から伊弉冉尊までの二神は百億万歳二柱の神は二万三千余十歳天照大神は二十五万歳是より天忍穂耳尊まで此御年数三十万歳瓊々杵尊は三十一万歳彦火々出見尊は六十三万七千八百九十二歳鵜葺草葺不合尊は八十三万六千四十二歳是より人皇の初祖神武天皇の御齢は大に劣らせたまひて僅に百二十七歳

或云此百億万歳の数くをうきよしてはまことに遠き事の其故を尋るにひとしきことはつへどもいふことあたはず 是を地の利をもて神へんとさぐるに是るきものありて其又人皇十二代景行天皇筑後国の行宮にありし時に一の僵れたる樹あり其長さ九百七十丈余僵れたる木を朝日には杵島の山を隠し夕日には阿蘇の山を蔽へりと云天皇是霊木なりとて此国を御木国と号給ふ 肥後国の阿蘇山 大分郡 八日市 人々問に其根株りて皆朽ず今も海中にありて其一々に其材とりて見るに其国は僅十二代の時に朽ちず僵れたる古木の事は其樹の芽ぐみてより以来いく代の年を経しぞ勘考なしがたしと測て以て百億万歳の実に伝ふると知るべし まづさらにも及ばず又近江の大樹はひとりと云て近江の栗太郡の栗河田の栖となるも其類なり

或云天照大神は大陽日の神を祭る事を疑ふべくもあらざれば天照神と神武天皇皇統連綿の皇祖とせば所謂日本大祖の宗廟と

瑞珠盟約

大照玉神の勾玉なる蛤貝尊八生成の勇
悍力にて甚不敵なれば宇宙を若
くして統治めんと欲して二神の動
もすれば根の國へ逐やり給う尊を
恐れ高天原の姫の君と見へく
幾永く退くるを雲霧を駆ま
て天と通り給ひしかども盟ひをなし
を神と尊の祖を咀詛て回心改過津姫
市杵嶋の三女と生し給う尊なる神の御統
の瓊とうそぐ正哉吾勝天穂日天津
彦根活津彦根熊野櫲樟日の五男を
生しまたまう
是天地の乳化ようやく
人のすがたに近きなり

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

崇め申す両宮を天神地祇と〳〵則天地の父母と合せ祀奉るも似よう〳〵云々て神代のより日本紀神代巻をかんがえて證とするよう外さじ猶日々物々の諸説紛〳〵〳〵て人々の意をかんがえて解る事の悉く信じ難く〳〵〳〵百億萬嶽の昔を論ずるより外なし猶又智〳〵強て意を張り膂を聳かい笑ふ堪えう

伊勢の物〳〵まうはま〳〵称ともみづからさとせばの事

伊の本社は元〳〵も〳〵此ふ地の霊此意をめでて今も尚此ふ強を遠津國の人の心を問ふ実と〳〵るのおかげまうでもまうでもいくらも〳〵尽ず捧るまうでもまうでも里の海山経て来るも此をかんがえて思ふに親のまや尚もあり此唯一向ふ雑念のこそ尊くなるひまご巻るも親ふ仕るも雲泥の差をりもむる心ふはる里のあるこなうともいうそう遠〳〵せんや是人間の実心を必敬るを待ぞ知れものにあり不謂性若則神明のちかせ給ふ尊こさうふ理を

〳〵推べうび

○手力雄　此神ハ岩戸ヲ開キ給ひし〳〵強力の神之武ハ健ニて猛きをいふ○本社の因懸拠の神社ニハ手カラとなんつゞ○末社の因懸拠の神社ニハ経ふらく〳〵ゐる也

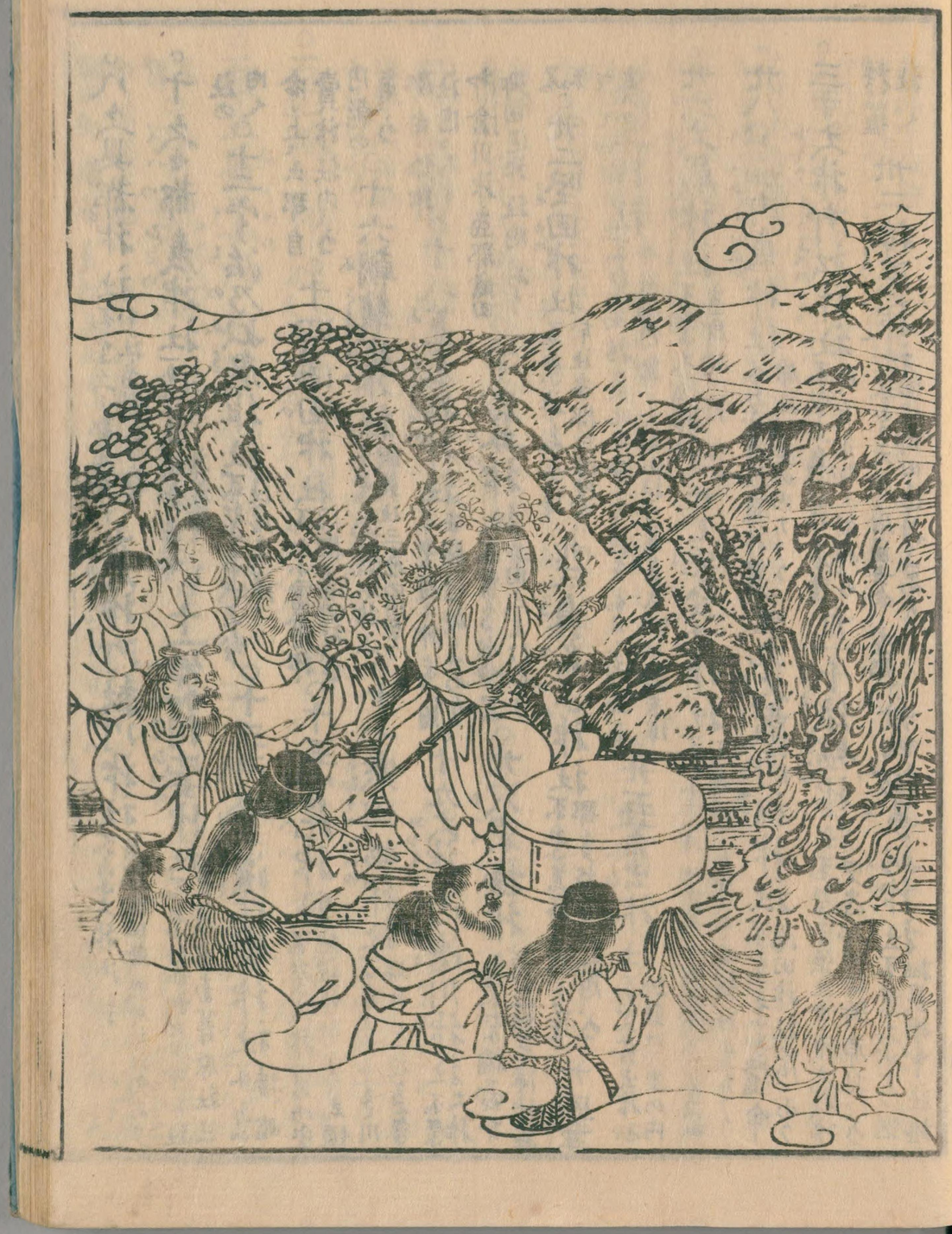
○栲幡千々姫ハ神代巻下云天照大神の御子天忍穂耳尊の御妻ニて高皇産霊尊の女ニ或説云栲ハ白木ニて千くゐ巻を織て献る也一方幡豊秋津姫ともいさゝか相殿の三神ハ同神ニ

○御鎮座の事　日本紀一書云日の神岩戸を開て出給ふ時に天児屋命太玉命二柱の神に勅して小戸の橿原に小殿を構て今ゐ尚在を此即伊勢ニ出崇神天皇の御宇神威恐ミ給ひ天の香山の埴土を以て瓮を造て天神地祇の社を定給ひ又宮中に於て神代ふの鏡剣ハ出崇神天皇六年己丑秋九月ハ神女を撫ハ姫と附給ふ大和國笠縫の邑ニ仮殿を造て豊鍬入姫大神を載奉り離を立〳〵祭給ふ其後大神の教ふ給ふまゝ国〳〵ゐよき宮地を求め給ふ垂仁天皇廿五年ニ及て倭姫命ニ託給ひ〳〵ゐて人皇十一代垂仁天皇

御女大倭姫命更に勅して義和の御諸の宮より諸國順覧ある（遷幸の次第は
つゞいて見えたり）終に同御宇二十六年丁巳十月甲子の宇治鄕又十鈴川の清きに
移〻まします相殿より天児屋根命を玉命まもりまします〇正殿を襲の宮又十鈴の宮
座の外此二神を外宮の西相殿より宮中に移し奉り後の宮とも朝日の宮とも申す（一説豊
玉葉
祢尾や朝日の宮の宮ともいへり）新のごとくなる草ぶきなりけり
神路山宮域のめぐり東一名大山 天照山 鎮る日ふるもつよ
神代の世や襲のうら并に都のそも今卿雲ぬらん
鎮まりを抑りむくゝ神路山月 天照ひろかるらん
宮柱ふとしりの秋の月の幾度うめぐりあふぞ
書送表中さやうなり月日のうけよりてそも天照神ぞたのむだうぞ
若松やちる天照神のまもしあれがひろうにしそ秋の夜の月
久しくも天照神のゆふかけて幾世をうひまうらん

神路山宮域のめぐり東一名大山 天照山 鎮る日ふるもつよ
鎮まりの日ふるくは天望霊鎮まる日ふるもつよ
千載集圓位法師 ※此歌の下の句誤れり
伊勢國二宮の浦のこと寺社考に
西行上人のもとへ伊勢國二宮の浦の海士
千載集圓位法師 ※此歌の下の句誤れり
伊勢國二宮の浦のこと寺社考に
西行上人のもとへ大日如来の御一體
ふるく神路の杣くを鎮まぼふるも松の風
千載後鳥羽院御製
かしこくもむすんまでもまもるかよ天照神の御末の松
百枝松 内宮御神木にて神路山にあり 俊成
いにしへ伊勢大神宮の前に宇治山田といふ所に
百枝の松ありけよ松の百枝
西行上人のもとへ大神宮の御事を問ひ遣はしける返事
荒波もこもをそ川のまなれやちりえぬ
東宝殿 西宝殿 正殿の東西にあり 〇宿衛殿 本宮の後の方にあり
八十末社 本社の御末社多し其名を記す
〇一社澤神社 本社飯野郡三渡村にあり 〇二宮社原神社 本社飯野郡三渡村にあり
〇三揖大力自神社 本社飯野郡揖田村にあり 〇四揖田神社 本社飯野郡揖田村にあり
〇五大山祇神社 本社飯野郡八村にあり 〇六川原神社 本社飯野郡佐八村にあり
〇七伊賀澤知神社 本社宮山の西にあり

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用



石窟幽居（せっくつゆうきょ）

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

○八久具都祢社 不祭久久都姫命 お社 当郡久留村
○九大祢御靇川祢社 不祭大祢御靇川祢命 当郡櫛田郷 数所祢社内
○十久々都麻祢社 不祭久具都麻命 上の久々祢社内
○十一伊加利比女祢社 不祭伊加利比女命 お社 月読宮末社 三座の内
○十二宇治乃奴鬼祢社 不祭る水上命 社地未詳
○十三御裳濯比賣祢社 不祭倭姫命 お上ニ云那自 賣祢社内
○十四湯田祢社 不祭大祢宮比祢 地辺祢 お宮荒垣内乾の角
○十五宮比祢社 不祭雷電祢 当郡湯田村
○十六朝熊水祢社 不祭る水上命 小朝熊社三座の内
○十七寒川姫祢社 不祭大水上命 お社
○十八荒祭姫祢社 不祭倭姫命 お社内
○十九大祢御靇川祢社 不祭大祢 御靇川祢 当郡櫛田郷田辺祢社内
○二十石井祢社 不祭る水命 若宮
○廿一八束穂祢社 不祭生名子祢 社地未詳 祢名
○廿二堅田祢社 不祭祢名未詳 お社 当郡三津村
○廿三眞名子祢社 不祭玉掃良比女命 お社 生不祭る祢社 那多佐原祢社内
○廿四葬多伎祢社 不祭小社 東馬洲 東岸 毛須社 是
○廿五苔出祢社 不祭苔出祢 社地不分明 或云今
○廿六大歳祢社 不祭大歳祢社 当郡磯辺村
○廿七毛受女祢社 不祭倭姫命 お社
○廿八宇加御魂祢社 不祭倉稲魂命 祢葦原社三座の内
○廿九大歳御祖祢社 不祭大歳祢 湯田祢社の内
○三十大祢御私祢社 不祭大鳥 祢名子 那有小郷土羽村
○廿一千依媛祢社 不祭千依比女命 大歳祢 児当郡田辺郷 原村
○廿二榛原祢社 不祭天須麻留女命 当郡田辺郷田辺村
○廿三麻良比祢社 不祭大祢 原村 依式帳 伊勢津彦命 お社 月読宮末社 三座内
○廿四栃長姫祢社 不祭栃長姫命 お社 園田郷 当郡

当郡宇治郷
畑村
○廿五阿波美古祢社 不祭粟御子道主命 須佐乃乎命 御玉
当郡 祢名子 祢名
○廿六宇治山田祢社 不祭長口女命 大歳祢 祖命 宇加
大祢御座地祢 お社
○廿七撞玉祢社 不祭 当郡中村
○廿八矢野波久米祢社 不祭 祢名未詳 倭姫命 お
○廿九大與度祢社 不祭 祢名未詳 倭姫命 お
お宮荒垣外巽角
○卅園相祢社 不祭大水上 児曽奈比々古
命 お社 月郡沼本郡 撰良
○卅一大國玉比女祢社 不祭大國玉姫命
不祭石已呂別命 大水上
○卅二鴨祢社 不祭 社地未詳
社地 月郡 櫛田郷 山上村
○卅三江祢社 不祭 御玉命 お社 社地 月郡二見郷 江村
○卅四牟弥祢社 不祭 宇加 長口女命 大歳祢 祖命 宇加
有小郷 有小祢 社牟弥相連
社地未詳
○卅五佐見津姫祢社 不祭 栗御祢 御玉 お社
当郡 祢名子 祢名
○卅六高天原祢社 不祭 社地未詳
○卅七子守祢社 不祭 当郡 祢名子 祢名
○卅八久麻良比祢社 不祭 依姫命 お社 国辺郷
原村 依式帳 伊勢津彦命
月郡湯田郷
小社村
○五十鴨下祢社 不祭 石已呂別命 鴨比女命
大水上 内
○五十一葦海祢社 不祭 石已呂別命 鴨比女命
○五十二長口女祢社 不祭 長口女命 お社 江祢
社三座内
○五十三殿祇御霊祢社 不祭未詳 社地
不詳
○五十四大山祇御祖祢社 不祭大山祇御祖祢
○五十五大山祇御祖祢社 不祭大水上 月郡 細村
命津布良姫命 児 お社 月郡
城田郷 津布良村
○五十六津布良祢社 不祭津布良 祢名
命 園田郷 当郡

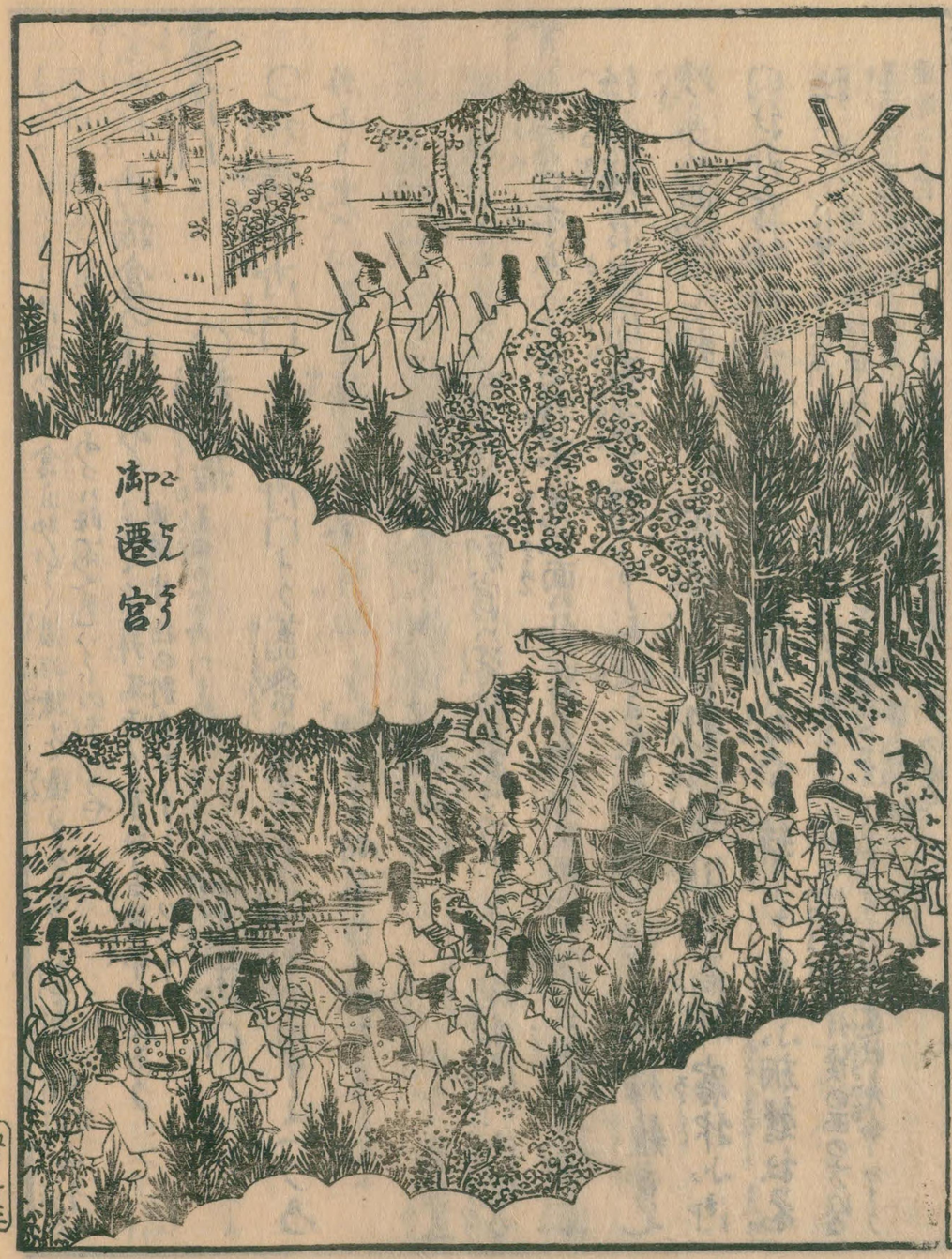
国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

上文見ゆ　今云山神　○五十八魚見神社　不祭月夜見ノ命を玉姫命社ト同郡魚見村ニ
不祭村田比女命本社　○五十九村田比女神社
國津御祖ノ社ノ内ナリ　○六十川合神社　不祭細川水命本社
不祭相渕辺ニ宇治ノ
神社不祭伊弉冊命本社中村西ニ在ノ長覚
勘注ノ文ニ無社地トイヘル中村ト云ヘル誤ナリ　○六十二國津御祖神社　不祭ル
生神児又田村比咩命二坐大土御祖
社社地艮方或云ト郡楠部村ニ在リ　○六十三坂手國生神社　不祭ル水上命本社
ト同郡田辺郷田辺村ニ
○六十四彭川神社　不祭彭川比女命大水児
社地未詳川合社ヲ辺ニ在
比古命佐々良比女命
本社ト郡楠部村ニ在リ　○六十六佐々牟江神社　不祭荒祭命本社
社地未詳或云ト郡松本村ニ在
村東ニ在リ　○六十五大土御祖神社　不祭速川比古速川比女
命水佐々良
命多ノ字郡佐田村ニ在リ

已上六十九社本宮ノ東南ノ隅ニ在リ俗ニ奥ノミヤト云

西鳥居ヲ荒垣西御門ト云　天津神社○國津神社ヲ天神地祇ヲ祭ル事ト
玉垣御門ノ西ニアリ　本宮古殿北ヘ多ク二度迁宮
アリトノ古義ト云
興玉拝不石壇西面本宮ノ乾ノ角ニ在リ奥玉神ト云ヘル
猿田彦ヲ神ヲ祭ルナリ
御稲御倉東ニ玉垣不ノ向ニアリ　御稲ヲ納ル倉ヲ同ク宇治
又御機殿ト称ヘルモ御政印モ此ニ納ム　機屋ノ事ナリ
多中約ルヨリ九月十一日祭

ヨリ十日ノ夕ニ御稲ノ御倉ニ収ル　○五十一伊佐奈滝　不祭ル
ヲ汲テ機屋ヘ送ルナリトアルハ誤ナリ　織姫機ヲ織ル事ヲ
一元社　御稲倉ノ傍ニアリ　コレモ遥拝不祭ル事ト
國津神社ノ別名ナリトモイヘリ
○北鳥居　荒垣ノ北ノ御門ナリ
雲御門
○北瑞垣御門　此御門ヨリ荒祭ノ
宮ヘ参ル人ヲ多ク見ル御政印ヲ押ス
荒祭宮本宮ノ北ノ坂ノ上ニアリ　第一ノ別宮ニ不祭瀬織津姫命
魂ヲ祭ルトイヘリ本社ヲ拝ス　則本宮ノ荒
荒祭宮ノ東ニ在リ　高宮ヲ云別宮ト号ス　○伊雑宮　不祭ル
伊雑諾宮瀧原並宮ヲ拝シ中ヲ以テ本宮ノ東南ノ隅ヲ拝シ
次ニ又西北ノ隅ヲ拝シテ高宮ヲ新
門社外宮ノ摂社ニ在リ　次ニ又東北ノ隅ヲ向テ遥ニ拝シ中ヲヘ小朝熊社ヲ
社ヲ云　○月読ノ別宮ヲ宮古中村ニアリ本宮ヨリ十八町　伊弉諾伊弉冊ノ両陵ノ西ノ方ニ
遥ノ宮ノ遥拝津姫命ヲ宮川ノ上ニ在リ　瀧原ハ本宮ノ別宮ニ不祭ル速秋津姫命ヲ
囲垣ヲメグラシ四宮ヨリ十里余ナリ　伊雑ノ宮ハ本宮ノ南ノ国ニ



御遷宮

新後拾遺　後冷泉院内侍

世の中を
たてしかへ
内外の宮柱
たゝ
祢
の

此國ゝ其ゐを見
聞ゝーみはおゝ
ーそうぐ古人の國と
摸せう
聞記ゝくゝ
ゝそ識者の數ゐよ
つゝそを改む尚
後日の改刻よ

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

御池 荒祭の後にあり 巡て此百八十間あり遥拝石の
○河島神社 不祭 伊勢 鈴鹿郡 河原村にあり 祭神 天照大神 荒祭の後にあり
摂宮 大石の左の方にあり 不祭 本社同郡姫命 摂津 住吉 神社 祭神 表筒男命 中筒男命 底筒男命 小朝熊の麓にあり
則小朝熊を坐を神此を俗せ遥拝と
神風 不祭 伊勢 度会郡 宇治 神社 祭神 天照大神 荒祭の後にあり
○河原神社 不祭 伊勢 鈴鹿郡 姫命 摂津 住吉 神社 祭神 表筒男命 中筒男命 底筒男命 小朝熊の麓にあり
由貴殿 一殿の後にあり ○酒殿 神酒を造る 此二宇共に酒殿の院内に此酒殿よりも西にあり 摂の宮の辺にあり
遥拝石 天の遥拝を納む深秘の有り
御饌殿 同所にあり 由貴殿の傍にあり 朝廷遥拝石 帝を辞し奉りて宮の西の石壇へ
多良館 二宇あり 風の宮の北にあり ○多良物忌 多良館にあり
附言 慶長十二年園女うり内宮多良の館の具物忌の家にあり 其具摂の蓋のうち多良双方を紙あり て其汚を
神風やうもをて川のもものうち多良のつとも
をもおうぐもべきものの有りてもそびものよ
摂をぐ 拾る彼大中臣補弘がまきをにる
このあやしみおもしろきたる右みまうらうの名の二万もこの摂具より多

あるみや 茅せ給うけ給うそうそれより
かすのふさまへ
むくしげさこ 此浦の奥をむくしげまうにあり
右の側より 依て明和の比も治営場にありまの真具摂社皆
五十鈴川橋長七間 俗に 此の宮の橋とて左のかう小梁橋
橋の東後に石あり 擬宝珠の造営毎に彫刻を制を施るまま西の南だうい改むるを
僧尼拝所 内宮の東にあり
風宮 五十鈴川橋を過て 内宮第七の別宮なり 祭神 級長津彦命 級長津姫命
右の方うあり
内人を奉りて風雨早災の停止を祈る
末社 風の宮の東南にあり 十一社 上六十九社 下四十一社 合して八十末社なり
氏神社 不祭 天見通命 荒木田氏
社田辺郷岩井田にあり ○久母宇津神社 不祭 大水上 少名彦大刀自神 或云
氏神社 不祭 天見通命 荒木田氏 社田辺郷岩井田にあり ○久母宇津神社 不祭 大水上 少名彦大刀自神 或云
谷にあり ○山神社 不祭 大山祇命 社
○風見神社 不祭 伊勢 度会郡 宇治 風日祈の宮 此宮より 七月より三箇宜
神社 不祭 末洋 神号 末洋 ○或説 鏡石神社 不祭 末洋 神社と称を社神路山の上にあり
通命 社津布良谷及中村
東小谷に在り遥拝の石あり ○矢野神社 不祭 多伎大刀自命 社 ○山宮神社 不祭 天見
熊渕神社 不祭 多伎大刀自命 社 ○御倉神社 不祭 伊勢 度会郡 矢野村にあり
天神社 不祭 伊勢 度会郡 中村にあり
社田郎熊渕辺にあり 御倉神社 不祭 伊勢 度会郡 中村にあり
已上十一社

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

八百會遥拝所 方丸の石つゝ
瀧祭宮 筝立別宮と 方の石つゝを云 石祭沢女神又は笑都波神共申
ていふ〳〵より神殿いなく石壇のみ也水の神
うるはしく瀧あり これを瀧祭のうちとも此辺をも八百萬
荒祭宮 お笑び山宗祕の別宮とて神位も荒祭宮に
不入もあり 瀧原並宮ばかり不入ぬまでを身ごゝろ加へるなり
瀧宮並宮 瀧祭の宮と
ならび座す

夫木 浪とゝ名乗の志川えの岩松瀧の宮ゝやまもゝん 西行

瀧の祭ならひの宮ゝなる神なり 牧来ゝく沖津ゝ浪 為家

系譜紀云 瀧祭の神と河の洲崎ゝ松枝なんどの一むら立て斗そ御社まし〳〵まこと
ど神体も水ゟ御座とやゝ云

河原祓所 風の宮の裾より 系譜記云 又十鈴川と御裳濯川の落合うるわしき松の木迄
瀧祭との間を ○宮のうち〳〵の神宝納殿へ入なる名河系御祓と等く奉幣助供の式ごとく
備門集 経勢の神語ゝの月校の本をよく〳〵見合せ考へるべし
川原ゝけゝれば

月よゝ神路の里ゟ出ぬらし御河のうち〳〵にうげそゝぶしき

前大僧正 通海

河合社 瀧宮石壇の南 河合ゝ石つゝあり 石祭細川水神儀式帳名社十二柱の内ゝ御迎宮乃
御馬飼内人ゝて忌服の穢掌ゝる中古ゟ絶ゝ今ハ勾
高倉殿 御厩の社 石壇あり 御迎宮の附古記御厩代御神宝
ゟ云ゝ

御厩 猿田彦 古い内外の御厩二柱ゝてみ〳〵とゝや神馬いま〳〵新座ゟ〳〵進らやゝ
ゟ云ゝ

外を代中絶ゝて今ハ尾張家ゟゝと久野氏ゟ
御馬飼内人ゝて忌服の穢掌ゝる中古ゟ絶ゝ今ハ勾子斗ハ代御厩ゟ
御厩の社 石壇あり 御迎宮の附古記御厩代御神宝
ゟ云ゝ

山神社 宇治橋の東 山の麓ゝある祭神大山祇命此石祭田ゟ
にある安の神社あり 本記国郡郷を定る此辺俗名館を賜く笑味名義ゝ

石安神社 石祭田ゟ

荒本田氏社 世ゝにあり 同ゟ 近年田辺伺候ゟ社ゟ

小社 村ゟ

荒本田の退神ハ天見通命を祭ゟゝ云ゟ此も此神の裔ゟ

○宇武神社 大永天文の比内宮の長官荒本田氏ゟて歌人ゝさゟゝて連歌

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

猿田彦森
大狩の松と
猿田彦松
とうろう

の式をそゞむ猶吟のみ白学井百首の狂哥あり又辞世の自筆双幅

翁奥うらふまゝ見ゆるん我世うる

神路山我こゝろにかゝるをもるゝのまゝ風ノ〳〵

天文十八年八月九日　一孫宣武

元日や神代のことも思ひ出る

△内宮末社續て並ぶ南御離宮より瀧邊まで二丁ほど川筋邊の景色は別記を見へし

御鞘倉小屋　御宮山の東の堤塚をさよあり瀧邊の流くより　拾出る奥石の砂礫を此へ納む

一の瀧　これ内宮より瀧邊村へ行る之瀧邊村とあるまでの川を瀧川と名あり

三方石　松坂より一筋くあり左の川すじ凡一丈巾方もみへさる石の半中より一株の松生ひつゝ有る三方より唯よう

松坂　内宮より是まで一里こしよう三巾町ぞうり左の谷川上を彦が瀧とよぶ瀧つゞき其源一の瀧の末方へ石窪出て其石の下宜ふゝて人数の掛のおろうちうるあり

のぐりてうる其基をこゞ」〇長尾　彦瀧の右の方のやまへ此ころに又六いろ石あり人これを拾うき岩うちとるみ此ちう

落より川中へ出ておる三尺余又六いるの石あり紛人此上又酒着をのこき庵丁ちとそうる事よる名分ゝ元〇ぐ紀ようろ

く名ばく〇獅子の巌石　茶のつゞきの滝なり松坂ち松阪ち

〇勅使留石　此石の次よりより此岩のうへ面ひくくなれば舟より流をひくくなれば舟より

猿田彦森
大狩の松と
猿田彦松
とうろう

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

合坂 坂坂より八十町余にして義堂あり 左右茶屋多し 此あたり猿田彦大神降臨の地なり

猿田彦森 合坂より此森の松のこずゑ行村より望む 瀧祭富 合坂より中挽の右の方にあり 其穴より入ること九十間ばかりにして瀧あり 瀧祭富し標石を立てり

家立茶屋 合坂より此あたり 此あたり猿田彦大神降臨の地なり

鼎石 高さ十余町あり 石と石との右なり

鼎石 巓石より二町斗下る 巓石ともいふ 此あたり猿田彦大神降臨の地なり

宮川 此名いづこの川ともしらず 物の香ふかき石の拘いづ

鸚鵡石 高さ十七間 七十間 和合山ともいふ 街道より三町 高さ十七間 七十間

おのづから其かたちをなせる石ともいふべし 此外

そそり岩絶壁松ありて尚図上にみゆ

家立茶屋

猿田彦大神此地を開き
給ひて始めて茶屋を
ひらきて家立の茶屋と
いふ 表の戸
一枚いむしろを
かけてしてあり
改めど別に
竈の間あり
石三つの
上に釜
を
そえうつ
ふに佛み
をうつしたる
額あり
書いんるるも
なし

鸚鵡石　亦名和合山

きゝ石の通り
石碑あり

うぐいすや内外よ
もうれつあふむ石

東都大伯
合歓堂
不言

此石に
湫しさ
閑人杜の夢

天保今井
仲書

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

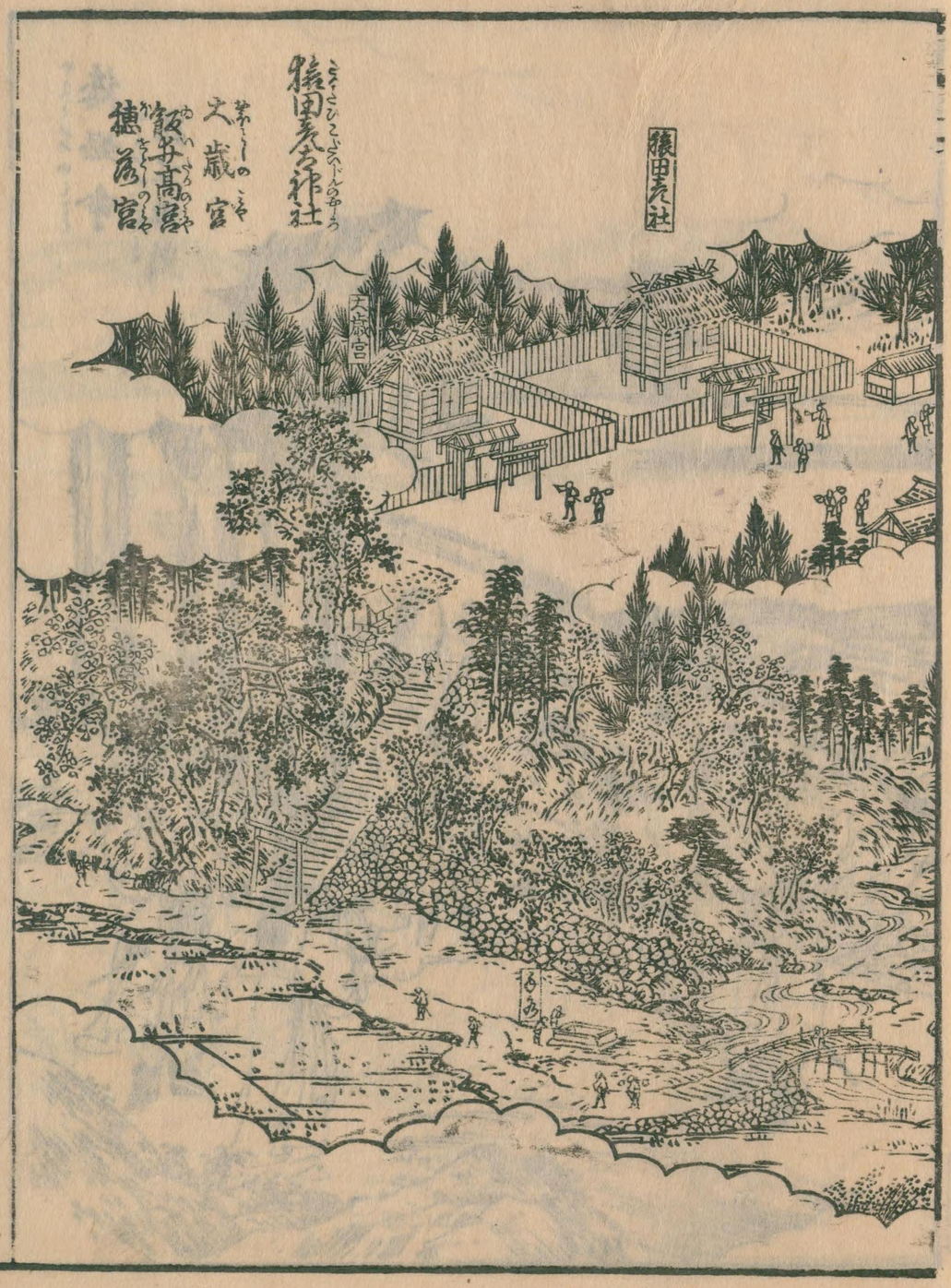
国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

其二

狭の田乃
稲を落しみ
雀をそ
追ひへを
久しく
なりぬ
秋も
更けぬる

度會之長



国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

恵利原 ○本郷村 恵利原村より九町あり 又エビ村ともいふ此所に朝熊岳への道あり

伊雑宮 伊雑村にあり俗に磯部といふ 内宮別宮の其一にて内宮より三里 祭神伊佐波登美命玉柱屋姫命二座也
倭姫世紀に云 皇太神宮御鎮座の始伊雑の方葦原の中に鳴る鶴の声ありて倭姫聴きて大幡主命と舎人紀麻良とを遣して見せしめ給ふに本は一本にて末は千穂に茂る稲を白き真鶴の咥持ちて鳴きけり されども及んで鳴きやみたり倭姫命其世話ひくき事は物言ぬ鳥だに田作りて太神に奉るものをとて彼稲を伊佐波登美の神に抜穂にて抜しめて大幡主の女乙姫に清酒に作らしめて御饌に奉り始めて彼の所を千田と名つけ其所に伊佐波登美の神宮を造りて皇大神の摂社とし彼鶴の居所を大歳神と号けしは即此伊雑の宮なりとぞ

大歳宮 或は磯辺の高宮ともいふ又穂落の宮ともいふ祭神生耶なり 穂を咥へ来りて落せし故穂落といふよしなり 穂落大歳訓 額に大歳宮 飯井高宮 穂落宮とあり

○飯井高社 祭神猿田彦神といふ外に数多末社あり○穂落の池は穂を落せし所なり

○御田宮は南にあり又は上旬吉日を撰みて田植祝ふ 此磯辺の宮中のみならずまうでものに見へざりて群をなす 本社は へだたりたる故に略して 内宮別宮の内なれば尤も尊むべき所なり

▲是より朝熊岳の道を記す 宇治楠部山神の社の左より登りて凡六十町あり

楠部嶺 宇治より十六町 茶店あり此所より左へ下れば二見への楠部村へ出る 一宇田嶺 楠部村より十六町

○笹原嶺 茶店あり ○弘法茶屋 清泉あり其そも洞ます ○天狗岩 笹原の小の谷にあり 形天狗に似たり

朝熊嶽 内宮より五十町 一宇田峠より廿町 茶屋多し 二十余町下れば朝熊村なり
此嶽は一山の最高頂にして伊勢志摩の境なり 金剛證寺を伊勢の地なり 蛇骨山の麓の朝熊村より及びたる名なり 此一山西南は神路山に続き東北は大海とのぞみて東に伺ひて富士乃高根良にあたり甲斐の白根信濃の木曽又美濃尾張乃遠峯此上より加賀の白山など見へて勝景なる佳境也

○岩舟弁財天 法堂の右の方にあり 竪七尺横二尺あまり廿二尺の石なり

○万金丹 此間茶屋といふ所に尾張屋内海より出し秘方を伝へしと云 又秋田城之介実秀秘方を伝へしとぞ 是より内宮より六十町

○下乗 是より内宮より六十町

勝峯山金剛證寺兜率院 禅密兼学にて塔頭十二坊あり開山暁台和尚中興は弘法大師なり其後衰微せしを建長寺東岳和尚再興有 後拂して海に放む

○本堂 九間四面 本尊虚空蔵菩薩○仏牙舎利塔 本堂の右にあり 三尺四方の宝殿の内に七寸四方あまり三寸計の宝塔内に長さ五寸八分廻り七八分四方の舎利を安置す 昔聖徳太子天竺より将来せしと聖武天皇天平年中に此所へ安置とぞ云

○左馬頭義朝の佩刀○ここに弘法の其器物数多の寄物あり 義朝の佩刀は此間茶屋より持来りしとぞ

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

蘇の基盤の秋田城之介不打の墓あそこに辺之西湖を画こそて其の制巧なり須し車葬の基盤と
○求聞持堂 これを明星水と云 ○熊野三社宮 ○文殊堂 ○極楽橋 石橋を架る 前の校だ一へ
○阿弥陀堂 ○二王門 往古此門之勝峯山の額を多の名勝岳と記む言の充室海右実恵の作 ○連珠橋 ○ほまの池 堅三十間余よこ十六間許池中弁字岩ともみ郎ち
御仮殿の池之二王門の前之
○雨宝童子宮 池の左之方 ○明星水 二間に面の
○経ヶ峯 朝熊岳の絶頂とも云 ○龍池 六月一日の外人の ○手向地蔵 明星水と云 本尊の石像 ○明王院 ○与楽院 ○多追地蔵 赤土の宝珠
○三昧堂院 二王門の東にあり ○随泉院 左之方 禅宗 ○観音院 又間に面して
○吾海庵 本尊地蔵菩薩 ○涅槃塚 ○芭蕉翁の墓
○薬師堂 吾海庵の境内にあり
神うこそやおりひもやけを祈らん 像
○稲荷社 ○舎利堂 毎年八月廿三日供養あり ○開山堂 ○東岳和尚
の像 毎年六月廿八日開山忌 八月廿八日開帳あり 勅使の参詣あり
○七社神宮 毎年四月廿八日より開帳あり 勅使の参詣あり
弘法大師の作と伝ふる神像 荒木田延季

▲是より四廓をそろり二王門へ出る又田廓をそぐに約て往古のおもかげ
堅神村へ出る一里之此石よりもう一の下乗石あり
▲朝熊のこねへ戻る廿二町の坂を下る茶水茶屋あり
垂木のさくら左右よりあり絶景やうけあり
朝熊村 家より二十二町下る戸数五十軒あり此辺二三人約よい塩合よりより上の
石城山永松庵 朝熊村にあり 此境内より秋田城之介実季墓あり高乾院殿菊侍
従空巌深空大居士 万治二年己未十一月廿九日 安部実季入道と記す 今奥羽社

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

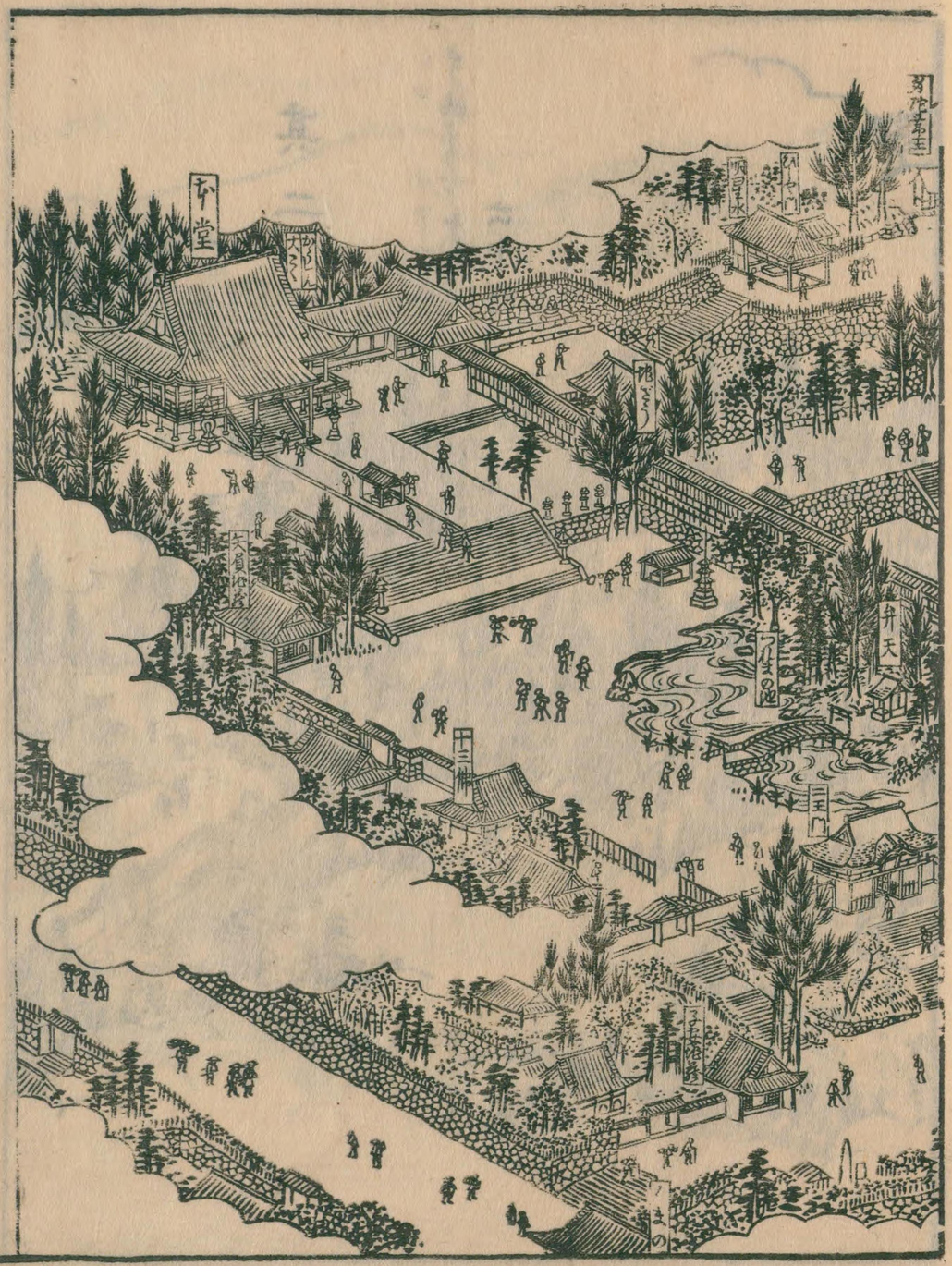
朝熊奥 吾妻海庵 富士見臺

曽聞人説思重ゝ
呑海庵前望士峯
四十由旬半空雪
雲間一朶玉芙蓉

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

朝熊金剛證寺（あさまこんごうしょうじ）



国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

其二

宇治より下(げ)ぐり石まで
六十町

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

國家の祖と國政不直の罪を蒙り此所に左遷し終に卒去せり其墓今に田家より祠堂を設けて其一塚ハ五輪之傑突入石に梁突入石に弘道と達して筆書乃名あり此所ハ嵯峨天皇弘仁年中の法名也云々

○同寺と福原右馬助墓あり此碑高サ凡尺余横二尺弁苔むして文字不分明

○一仕殿順積道薀禅定門濃州大垣城主福原右馬助慶長五年十月二日

○心誓一諾居士家臣福原喜三郎○又真得如珍居士家臣名字不明碑二ツ有

△勅使村西のかた小橋を渡りて右へ行ば二見乃浦へ行ば二宮田村辺村なる山田乃勅使村を過て一宇田村へ行ば東海村に至る

小朝熊社 東海村東 俗云堀内大明神 又大山津見命を加へ二座とも内宮摂社二十四座乃其一也 寛文十年大宮司精長勅旨田沽をとりて再興ありしとなり

今の櫛玉命大歳神大山津見命を合祭ありし

勅使塚 小朝熊の宮の東 名所○橋本里 これも朝熊村に属せり今は東海村の東に今も地名のこれり

いでせんかと我渡守よおちさくに舟のそちる朝熊の浦

寛延 定忠

末 いでせんかと我渡守よおちさくに舟のそちる朝熊の浦

中務寺よ宗重

勅使塚 勅使より又町東海村の内五川村尾傍にあり 石上神宝の時の勅使乃墓と云ふ

神境の内の正治年中の解文なり 社説并に神境も弘安の時改むるなく屋乙世一を実文なるものにて拠出せし一ツの古境なり 親拠せざれども依て非境なるを知るべし 勅使社説造立の時古中より神宮の祝ら新殿の内より出現せしと云ふ 此外より識伏して境を納んとするなり此小祠自ら今も境と若干非神と称せり 此石汝千石ともいふ

神代より考りをもて勅使やかて宮より先に見る

荒木田尚良

五川山 朝熊山乾の方に当る 勅使より此所を経て伊勢参宮名所図会に見ゆ

俗ふもとに川ありて朝熊ヶ岳より出る

古歌 汲ふもとの川の

隆弁

東海 社西東海村 田中より

不知柔稲依比女命 大歳神の児

汲合 通称 二見の江河之又十乾川の末にて東西の湊より落る汲の末より約合ふ俗に汲合と書ふ 堺の辺りより葦やあり 左りは雲井神宮の御塩を汲む渓あり 此所より巨石あり 右の方より巨石あり 二所共に約合ふ 渓へ約るなり 右の方へ十丁ばかりの後より約合ふ 標石あり

○破石

○汲合濱 汲合と松下江村より四方より来る塩と約合ふ処なり 汲合と称す 名所にひろ川より雲消て光るもの汲合の浦

長明

歌
古
俗ゟ三津村の仕事次が
まるふるふ古のきろと仕へ〳〵ゟ
本ゟ絶とろがろ〳〵
きれの湯曲ゟ菊仕せ〳〵
ろ古も二見ゟまゟ次
とゟ久ゟう其寒君ゟ
ゟ〳〵ぐれぐも法園一見
の途ゟ乾記〳〵てやぐそ
藏里〳〵の髪ゟゟ〳〵
古の後仕ゟて我ゟ幸菊
先よやぐろあ〳〵里地〳〵の
物〳〵ろをゟ〳〵つれ〳〵
ゟ見ゟ仕勢や日向の
ゟ話ともろ仕
ゟれゟや

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

山田原村　塩合のさし入の村三津村のつゞきなり
右の方ハ西行物語又ハ後番撰集の後に付たるとそ川合に入れが為とよまれたりや寄る此
新古今
きかずともこゝをせにせんほとゝぎす山田の原の杉のむら立　西行
○西行法師の旧跡　山田原村の寺ありしかども今は退転西行安置も西行谷とも云　宇治の西行谷よりはるかに後居せられし年数も長かりしやと覚ゆ又新撰集に西行二三年ありし宮川が合にて佐(?)勢国二見に住ける(?)とぞ云今ハ昔むし　とて本二三本此地に少く残りし経
此所ハ溝口村の領なり　○隼人古墳　塩合ハ行西川なる右二天なりの石たてり　里人此所に隼人塚と云をば世に伊勢国度会郡長池村隼人と云者戦死せし墓といふ天文の乱に村山探部少輔武則が党二見にて戦死すと云ふ因りや
三津　朝熊よりの道と山田よりの道と出合ふて此村の中に家従(?)が末紫水村某と云る者がかたへ来るまふよう三石浜を三又十町ヶ風なり
あとくまより立石浜を三又十町ヶ風なり　が見えて来るとこそ伊勢三郎が古刀又茶店の者とそありの
を所蔵す　本ふて元長三又平元禄八枚の短冊に付たり弓の本手に有
末地の緒の上に糸にて結ひたり　もさてそれはしき
八枚の短冊又
神にかけて◯とこそなれ　ふるさとのそれはまさしきのたゝかひ
まことにこは爲に其中の所あり　まつりのことゝもにてまたかのみ　いかにもあれ
あしくさはるは此むかしやもとの地にまかりなる事わざに当てそれがとかく
ものゝ名も所よりてかはりけりはのほかしハ伊勢の浜荻
葦のかりこの中に北ぞくこうすきやかて又似くさやかて又に似たり
さて又振分の神も当しめせ又十銭の川の清さにもをかく
少き菅で箱ハまく引ぐし向ふ　へ道に立ちまつのやま

五峯山密巌寺　山田の原村にあり　本尊十一面観音立像仏通禅師開基　五峯とは鷲峯なとみつみね
ぬまて(?)行を云径の葉北峯の名より峨鈔嶺の名を経に名付上古の宮ハ又神宮みや是をそせし揮平あたりの弓にて神伽記しよると此前ひよりそこ
三津浦　又三津の入江　三津の浜とも云　舟つなぎし家を引舟のまゝしと云　沿よりこ舟をうく二見郷三津村の南の方にあり
山家集　伊勢にまかりけるに三津と申所にて海辺春暮と云事を神主どもよみけるに
過る春塩のみつより船出して浪の花をやさきにたつらん　西行
夫木
我もさぞ庭のいさごの土遊びさて生立てる身にこそありけれ　長明
濱荻　三ツ村の北の方に古跡あり　里人の云伝へにて今ハ僅なる田の中にわづかなる旧跡を残すばかりにて是ぞ旧古の浜荻の跡なりとて此辺に濱荻といふ名を呼ぶ。凡伊勢の浜荻と云るも伊勢の国の人の芦を浜荻と云るハ古語の遺風にて即国の土俗の言なれば伊勢の浜辺に生する芦は浜荻といふべし　古跡といふべからず此所に限るべからず
菟玖波集連歌
草の名も所によりてかはるなり　救済法師
難波の芦は伊勢の浜荻
又按るに芦を荻といふ事上古にはなかりしにや此国にかぎらず詩作にも芦を荻とつづけて一物とし其余漢土の諸書にも
万葉
神風や伊勢の浜荻折ふせて旅寝やすらん荒き浜辺に　読人不知

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

鷺島　一二町程の海中にある小松多し鷺の形に似たり　○やどりが濱　石の方にあり　○御座石　是か西一町ばかり中臣祓を誦す　○丸山　は東にあり
○亀ヶ森　一町四方程の海中に亀の形に似たり東の方二町ばかりにあり　○姫小松　東の方三町にあり　○橋江　世に古橋の御園と云ふ神風揃ふ
伊勢三郎義盛宅地　是町東　三津村より山の林叢の泉院といふ寺の竹林なり　義盛旅所ハ江の三郎
もとは鈴鹿の山に住て山賊を業とせしが義経奥州へ趣く時伊勢三郎と名乗りて義経に属し軍功多く宗盛を生捕り義経都を去りて後伊勢国に遁れ帰り守護首藤経俊を襲ふ経俊これを拒んで討取らる
義盛が家に宿つて義経の容貌を見て遂に主従となり西国八島壇の浦にて軍功あり
伊勢三郎が硯といふ者此所にあり是に水をたくはへて早魃にも干ることなし　○硯石山にあり
中にあり　○とさの岩　いは硯石の上にあり　ことさら名とする也
立石　立石濱の南への村より　御塩殿へ行くみちあり　宇治山田の人立石濱にて身を禊する所ての茶や
休息所として尚酒飯其味をよくして賓客の甚賑はし屋楼去社観
堅田社遥拝所　立石村出て立石の傍にあり　一町余り入て表の内に社あり
粟皇子社　佐見都比女命一座内宮末社の
内也
出口村氏社　堅田社の向ふにあり出口村は繁昌して社をかゝり
音無山　此名は当国に二ツあり一ツは外宮神苑の山一ツは二見の山也

二見の浦は鴨長明が伊勢記に
二見の浦は人々のかりて遠く海山を見るに東は三河遠江に駿河の富士の山なりのうしろ見え良くに当つて甲斐の白根信濃のこさらあり小
に美濃尾張の山々もの上より加賀の白山見え北は多度の山鈴鹿の三ツ子
山西に布引山伊賀国の山々も名も知らず近くは朝熊山志摩国の方に
朝熊川を隔て昼川の横根と云山あり其山の西のきはに滝の宮やしまとを
海山を遠く見えん海まてなん云云
御裳濯集　皇太后宮常陸母
青葉の山郭公まてきこえけり恐ひき鳴さを鹿の声
五百番歌合　顕照
音なしの山時鳥なくこゑは人にしらせじ
松やにもぬ風やもみぢの風ならぬいつまで秋の音なしの山
太夫松　伊勢三郎が腰掛松と云ふ音無山の上にあり太夫松を枯木となる長が城跡なり故太夫松の名あり
廻船の目印とす　○城跡　伊勢三郎義盛が宅とい云ふ　あやまりなり仁木氏が城跡也
○是より二見浦立石濱にいたる程ちかし但し是より船路の列に加へて
これに着く其は船路の限り川されより船を出して浦々渡くにいたる

伊勢三郎義盛見つゝ主従を
繋ぐ

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

これを清めぐりとらへ

○山田より二見の順路

河崎 神田村続き山田より二見まで行程二里 宮川より此まで二里半余なり 此地毎日魚市あり民屋広く甚賑はし

伊勢踊河崎音頭などいふ事は爰に始まる所の俗なる諺なり

○河辺里 河崎の古名なり

新名所歌合

ともし人やよるはまさに集らん河辺の里に飛ぶ蛍かな　荒木田尚長

二軒茶屋 河崎の往還にて茶屋あり又山田から上河より小紫坊を経て爰に至る道もあり 此ところより舟をうけ大湊神社前に二見へ渡る見物するもよし

黒瀬 二軒茶屋を右の森の内に社あり此村の氏神なり

常柑子 宮の後にあり 南都興福寺の橋と同種なり 其実を以て小さし 諸兄公を祭るといふ 綿云首真は福寺の橋とのちぎりし也

毎歳正月元日より小此実を求めて代りにまうりける時下されける花をそ

ちをちぶろは伊勢に見る人みなたよう嬉しき花柑子哉

按るに此歌は慈鎮大僧正の詠にして慈鎮は天台の座主へ此歌は未だ柑子の伝はり人の遠りしより湊に至るなるべし ○諸兄公の母は県犬養宿祢三千代とて伊勢の人なりしより此所に宮あり 柑子の古説あり橘の実を賜ひて諸兄に姓を賜ふ万葉集に見ゆる

万葉集

橘は実さへ花さへ其葉さへ枝に霜ふれどいや常葉の木　聖武御製

通村 汲合より東北にあり 八方にあり

往昔より此所に楽人住居せしが川の水より退転して申楽をはじむ 伊勢三座の猿楽は勝田、青王、和屋也 勝田は此村にあり 和屋は一志村にありて今も申楽一座あり 者の名跡なるべし

箕曲氏社 西南の方にて二見へ行く大橋の川下にあり

昔は流社といふ洪水に流れて爰に止まりしより称せり ○天神社 菅原神霊をまつりてこれを松江の天神といふ 又天神瀬ともいふ

○大湊へ行に松江のまへば右の方岸のうへ数株の老松あり

神社村 松江なり 海上に接へ一本松十貫松といふ今もあり

御食社 神社村 祭神速秋津彦命 外宮の摂社十六座の内延喜式帳に水戸御食都神社と者小社今者

○檜尻橋 川崎より神社村へゆくみち ○河原淵社 祭沢女神 檜尻にあり ○河原大社 祭川神水神 新開村にあり

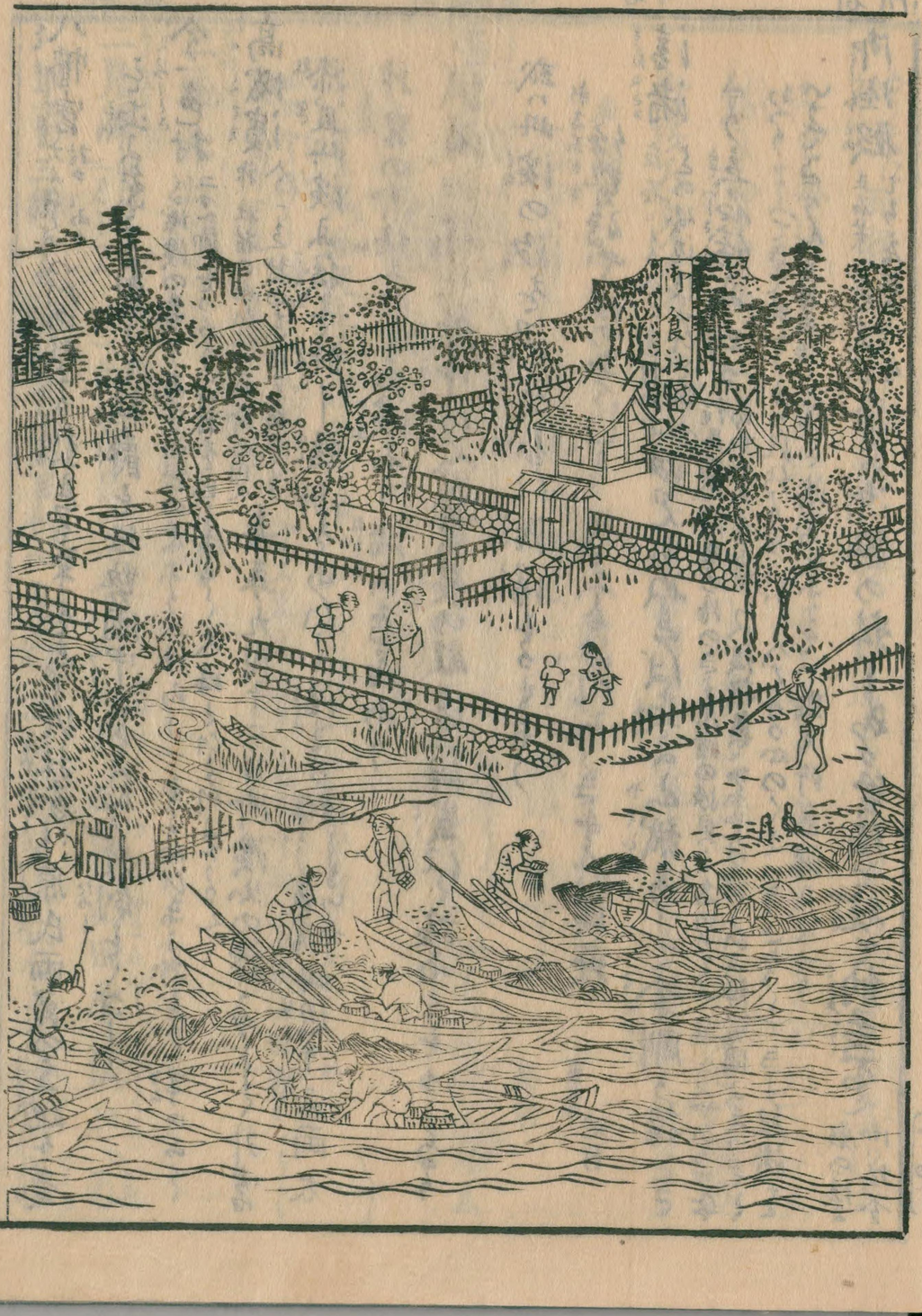
小林御役所 村にあり 南に見ゆる森に虎丸孔雀丸御船倉あり

○大津社 祭神葦航速命 竹ヶ鼻村にあり 延式帳に載る式外八社の内也

大湊 城浜海を涵して海上にあり今一志村より船にして多く渡る人家多く回船つどひ古名小松湊なりとの説あり ○紺屋取清水 此神宮遷幸の御船湊につきて清水をたてまつる

志貴屋社 大湊の西の入口右の方森の内 延式帳に載る式外八社の内なり 祭神海童神

神祇本源には塩屋社と記し貴字は宝の字の誤り志宝屋社なるべし



神社村

昔八大津ともよ一村
なりしとぞ神名帳
再考ふに記せり三河
遠江の地二十餘里
松浦の浦ひろくて
四方松多しと
巡りの松を
此渚より
生ひ出でたり

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

八幡宮大くるしの村あり　この比より参詣する事をさゝげ社家渡原氏両宮の支配を受
むかしよ祭事を勤よて叙爵を経勢国中よくかゝる例をく〳〵
今一色村　高城濱の東うあり此村の東より入海とひらけ入海あり
二見郷をめぐり江村を出るまでく大海
高城濱　非社村の今一色村の東のさ海ぢう　毎年九月十三日御濱出の神事ありく外宮
徐且此濱より後を艇一漕湖をあいく漕まる俗うに長宮此辺より両太
非宮の御塩をとるの濱あり　清浦の名あり　諸人の居あり
お舩濱　三石俵ようの汀　即中の人家毎の喪の服をこの時宮にく塩あることをうけ
或ハ此濱の汲を汲て来て浴湯をするもあり
新名所絵合
伊勢物や浪のあしたより月こそ多浪風なけれ
清浦　立石ようの今一色村の辺をいふ　汲てらぬよとばまよく舩みてこ金剛ご掛とさ
そう三石俵　舩もる　住馬楽二伊勢の海のきよき名のうちや摘んで見へやひろうみや
もやいろそんやこ後撰集二出れやけのこひこ伊勢国よまうまく
かくりやうてきて汲そうとうたれ行りなれいいうでこそん　歩持内侍　○清き渚多家うそい對馬竹島浦をよう
御塩殿　三石茶屋町の西へ入ちう左村の小こみ　大神宮御饌の料とめる雲塩を焼て納奉る　殿の後ま御塩釜

あり茶屋有
両宮東西御室殿を摸して造りり条神の御名い古書に見
えま毎月御塩奉献式日より此所より馬を九辻をゆびてこの良
鍬をもり宮地の入口より御塩橋とつゞく他の用れい継来せびそを
御塩殿とつゞく御塩役人二見より両宮までの途中三とまりあるを禁ず

名産

二見うらこ神そび三歌御塩殿みや代ちぬ浪うけて　長明
三石俵　江村へ約三の法こ○海中左右よ三歌三石あり浪連をうて
堀離き場うこの二つの石三つ有うち三石俵とう
いまて潮浴ー汐を汲ん老と砂塩とう
夫木
とう名の井ぢ三石俵の白浪いつのうき泊
山田守浦ー住む人家宮ちんと物ー人家みほ
後よりつゞれが宮中よいぢ
三狐神社　此社のかこうよ穴ありて愛も
穴ありつ　七御の無名ん七ひとい江村。三津。山田原。溝口。芝
二見浦　此辺をとゝく　七御の無名ん七ひとい江村。三津。山田原。溝口。芝
を第三郷とゝ此辺より芝内宮ぢん　左村。西村。出口を此三ひとゝ云称る出口

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

二見浦

二見の浦は、松浦湾の北の方にあり。この浦の近辺より三つの名を得たり。二見の名義は、昔、倭姫命、この浦にて御禊をなし給ひしとき、二つの石、海中に立ちて、夫婦の如くなりしゆゑ、二見と名づけしとぞ。また、昔、この浦に、二見の翁といふ者ありしゆゑ、二見と名づけしとも言ひ伝へたり。

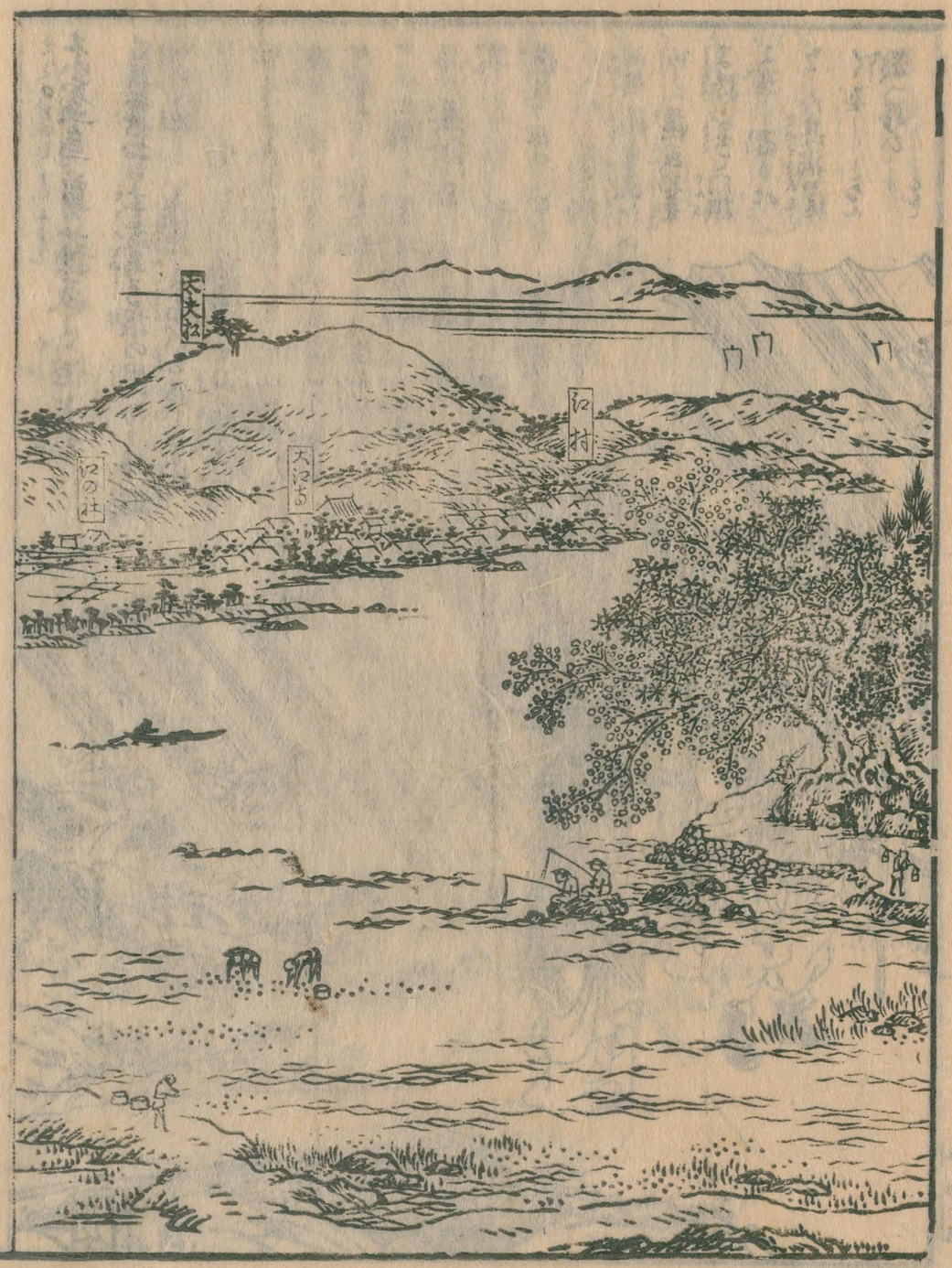
国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

い経ること今一とせ村を合て山三ヶ所と云云
四ヶ一帖ごとの中法の乳母と武家の乳母と
愁訴して経ること元のごとく神気となること
誤ること二度と神慮と
給送開中
まもるべきことなり
金家
玉葉記云 この浦の景色を見るに都の
勝ること百千倍の云 烟う和一孤島儀
里此濱は依景明称して
ふるし 沖漾浪あるのごとくなる
称さびう給ふ実をば云々
するうふるがやうに東より
さざの名紙おくり
遠くへまでは入海のうちまでつづく江
のごとき石橋を架わたして漢の灣曲を
書竹を植ふて過なる景色
中略 定家
源親房
荒き濱辺の岸を押ごろうと山陰
飲肴の垂地まで
美景拂

中略 と
後の止給をべきたうり
のごとくなれ中暑 かの孝ようの
てあれ松繪よかるべきこと
とくども誰も問べくも
拂ぬるかうごの波間をたよりて
ぬるかごの波間をたよりて
ふる翁の渡をつく雲の波烟の浪間
中略 修良慮島嶋海濱をかし
この灘の名にながれて
て雲うなりぬるとたれども依籠
りなー里の名をもつづく
あらばこりてそひ給とも
花の浪立べきみなりぬ二ヶ所の
磯しうけのごとくにさし給
和うなるも西行上人のごとく
宮川の方合をも此あたり集

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用



蘓民将来社

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

そのとのゝ　ことそそん

孝霊盃鳥尊藤氏の宿とゑ

東指松伴お曰まく盃鳥る根の國へ行給ふ時
国両よ若ー〻浦伴う宿給へとも泮
ざるより家よこりて此國の巨目藤氏の兄
貴ありて巨目いまゆるなれども心性不仁
藤氏いへー〻れども恵ふの心おりてこるの
御宿給やて膳本の飯をとりいまゐれおう
アハサの國より暴疫鬼来るの一ゑー
給ひ藤氏ゐ郎に茅の輪と送りて
茅させ給へ日まるりて一村の内
藤氏るおのく茅おり〻記し「急ぐ」
ふりかくてる別れよ孫でろ
此後疫病流行の時
ゐ孫ふ玉て門掲
よ蓋ー〻ゐれ
ちくび其掲い退
くゑー〻とうん
教へ給ひー〻

人ゝも祇園をその日
に素盞嗚尊の
祭をなりのいその
送ゝりとそ

ゐの根源曰素盞
鳥尊の即祇園よ祭
年改天皇にて元慶
天祚ゝもや之南海
の女ふと娶て八王
とせ給ふ彼国
の村ゝ其女ふと連さ
給ふより自出雲南海
とふい琉球國のる
ゐく則藤氏巨目ふ
琉球人なるべー今ゝ
琉球の名に就来報
うゑど此名あり琉球と
称宮とゐ曰て沙渦羅
王玉の女ーらゞ実い
琉球のゝみやゝん

春文こけさらく
南海のるもり

特1
274

三都
發行
書肆

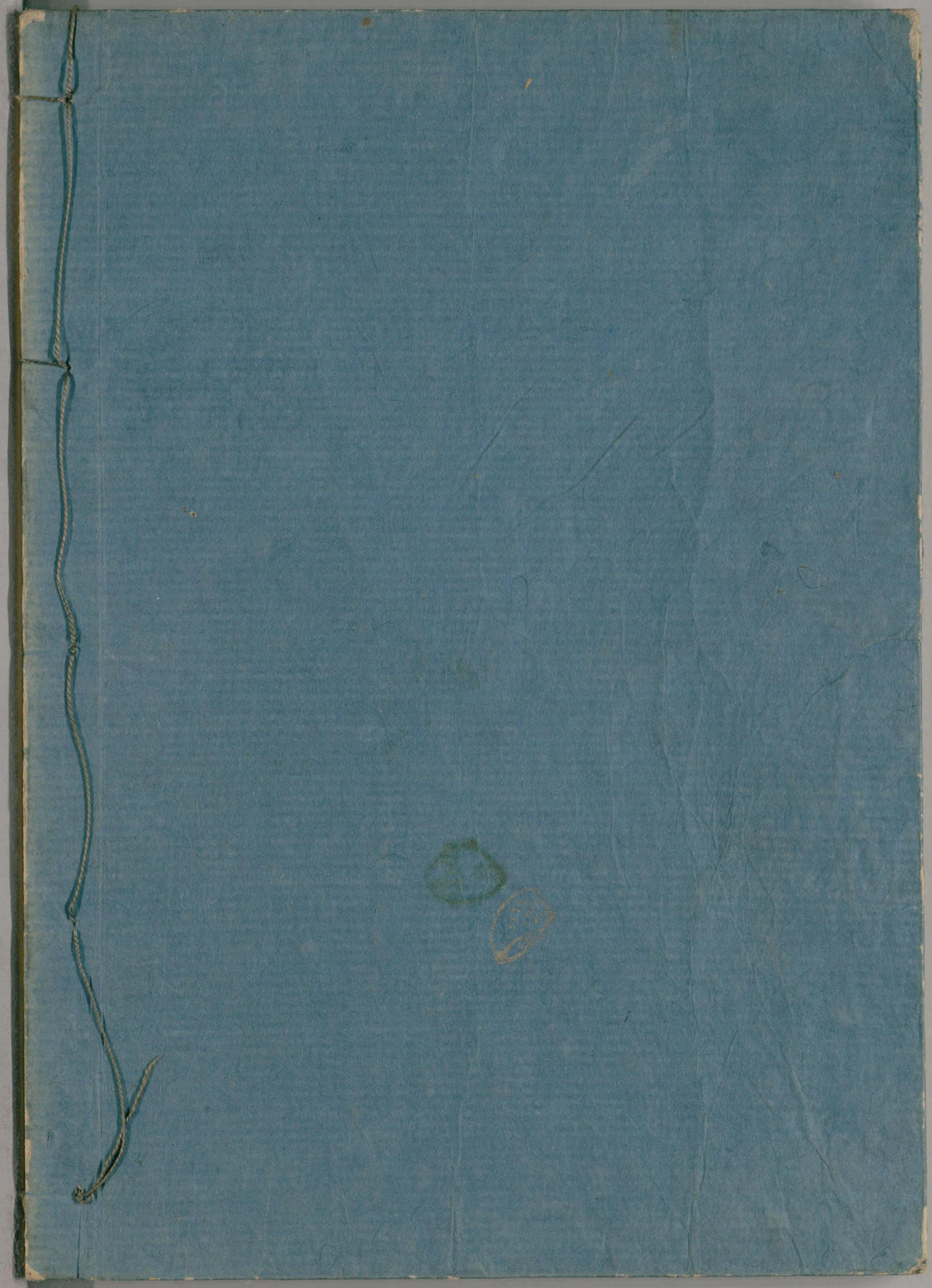
江戸日本橋南壹丁目　須原屋茂兵衛
同貳丁目　山城屋佐兵衛
同下谷池端仲町　岡村庄助
同今川橋南詰　永樂屋東四郎
京三條通御幸町角　吉野屋仁兵衛
大阪心齋橋通北久太良町　河内屋喜兵衛板
同　心齋橋通備後町　河内屋卯助行

[五丁裏十七]

宮も此風折まゐび一寺の僧俗も彼跡祝迎
みよとるりみ茶うさ亜とそそこづうう此辺
の跡くはるなどるよもあ〳〵ん
附言　毎年十月十五日の夜る刻大湊二見浦の沖汲手
をもろふよもあうくつくれと七汲日とつひくをも
（歩約）おくくくくく
早旦の海大三十日海藻刈の汲ますあり肥為国もれ
其ゝ夏晩刻迄の日よありて他日よみるるー
興玉石　玄石斗神よあり　古ほひよ八ん汲満ぬ三ぐん（ぐ）
母衣其外種〳〵の石みんて此辺二見石とて和ゝ白き
江村　玄石浦より東南
附言　小皇権少納源国永卿の家集よ二見破却のねよ
一歌のやぶれにくら（不祝つちの嘶よ教ゝくるぶつの甲非
ゐ
潮音山大江寺　真言宗本尊観音二王門み
江神社　社村の巽　三町あり　祭神長口女命　大歳神御神
社二十四座の内ゝ　（俗式帳よハ江村の西ゝ）

（）　郡名空海の書此寺基明　土俗ゝ承治記
もたゝ寺の破ゝとうちの一さ我ゝとうう
両岸よ石あり　（猿田彦石　猿田峠石）

[五丁表十七]



国立国会図書館　　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用